

出会い その5 メキシコの医師との因縁の出会い

先月のデンマークに続き、今月はドイツでの出会いのエピソードです。

6月5日に乗ったライン川クルーズ船には約100人の乗船客の中に9人の日本人がいました。一家4人のグループ、年配の1カップルと若い1カップル、それに自分です。いろんな旅行社が集めたグループが一緒になって100人となっているものです。フランクフルト中央駅近くから出発した私たちのバスのグループは約30人。乗船場まで約1時間のバス内では、女性ガイドの軽妙な案内と進行で、全員が出身国の紹介をしました。

ノルウェー、デンマーク、フィンランド、アメリカ、メキシコ、チリ、フィリピン、マレーシア、ニュージーランド、日本となかなかインターナショナルな構成です。昼食時には他のグループからの日本人も一緒になって9人が一つのテーブルに座りました。

「帰国のお土産を何にしようか?」「訪問先でよかったところはどこでしたか?」——お互いの情報交換が始まりました。ドイツに永住している娘さんに呼ばれてきたという70前後の壮年は「ドイツではゴルフ三昧。道具もプレイ費も安いのもう満喫、満喫です」と。若いカップルは南イタリアから上がってきたようでした。

「ラテンの気質とゲルマンとは本当に違いますよね。どこに行っても陽気だったイタリアからくると、なんだかすべてが重い感じがしますね」

ラテンといえば、典型的なカップルに会いました。メキシコからの60代くらいの夫婦です。いかにもメキシコ人といった口ひげの立派な夫は真っ赤なシャツを着ています。夫婦で話し合っている懐かしいスペイン語に惹かれ、私も思わず話しかけてみました。

「Soy de Tokio (ソイ デ トウキョウ=私は東京からです)が、メキシコはどちらからですか?」

「メキシコ湾岸のベラクルスよ」

「エッ ベラクルス? 私も行ったところですよ。もう20年以上も前ですが」

かつてラテン・アメリカの特派員だった時代に何回か訪れたものですが、標高2400mの首都メキシコ・シティが涼しかったのに対し、海岸都市のベラクルスは湿度も高く暑かった。そのせいか体調を崩し一度はひどい下痢をして医師の世話になったこともある。そんな思い出を話すと、なんと「Soy medico, tambien (ソイ メディコ タンビエン=自分も医者なんですよ)。旅の留守中の病院は息子に任せて来たんです」と手を広げてジェスチャー豊かな応答。

同じベラクルスの医師といっても、もちろん私がお世話になった医師本人ではありません。それでも土地柄と職業のあまりの偶然の一致に話はさらに弾んでいったのです。世界は狭いものですねえ!!

出合い その6 女性バイオリニストの温かな心遣い

もう一人の在住日本人の話をしましょう。私はグリム兄弟が生まれたハウナウから列車で兄弟の博物館のあるカッセルに降り立ちました。

駅の案内所で行き方を確認すると、博物館の近くまで行くバスは出てしまったばかりでした。やむを得ず、次の手段を考えようと駅のベンチに腰を下ろしました。と、「日本からいらした方ですか？」とやさしい女性の日本語が聞こえてきたのです。目を向けると彼女の手にはバイオリンのケースが握られています。

「ええ、これからグリム兄弟の博物館に行こうと今地図を調べているんですよ」

私が見せたパンフレットを覗いた彼女は、次のバスまで時間があるし、ドイツ語がわからないとここでのバスの移動は難しい、少しお金がかかってもタクシーを使った方がよいこと、などをアドバイスしてくれました。親切な説明にお礼を言いながら、私はカッセルの町や彼女のドイツ滞在の動機などについても聞いてみました。

渡独して3年目。今、カッセルのオーケストラでバイオリン奏者として働いているのだといいます。

「それは偉いですねえ。でも日本ではダメなのですか？」

「ダメなことはありませんが、こちらにはいっぱいオーケストラがあつて働く場や勉強の場もあるのです」

「じゃあ、健康に気をつけて頑張ってね」

私は自分の娘を思いやるような気持ちで激励の言葉をかけたのでした。ほんの10分ほどの歓談でしたが、何かほのぼのとしたものが胸に残ったのです。見知らぬおじさんに声をかけ、いろいろと助けてくれようとしたやさしい日本のお嬢さん！どうか願いどおりの道が開け、未来に幸がありますように！

出合い その7 世界は「混ざり合う方向」へ動いている！

ヘルマン・ヘッセが育ったカルフに行く途中のことです。特急列車のテーブル付きの向き合った4人席の私の前には肌色の浅黒い男女が座りました。男性はひげが濃く、女性は額の真ん中に赤黒い斑点があります。もしかしたらインドからかもしれないと、私は遠慮がちに声をかけてみました。

「いえ、自分たちはスリランカ生まれです。現在、自分はスイスの時計工場です仕事をしています」

「ほう、それでどうして今ドイツに？」

「今日はホリデー。しばらくぶりにドイツに住んでいる兄弟を訪ねてきたのです」

陸続きとはいえまったく自由な往来のようです。そういえば自分がデンマークからドイツに入国するときも入管の手続きも荷物チェックもまったくありませんでした。ヨーロッパの各国がEUになってから、一度EUのどこかの国に入ると、それ以降は他国へもほぼ国内の移動のような扱いになるとのことです。アメリカ、中南米を回っていた特派員時代

を思うと夢のような現実です。スリランカからの夫婦も、そんな自由の中での動きなのでしょう。

将来的にも数々の解決しなければならない問題が山積しているとはいえ、世界は間違いなく混ざり合う方向に進んでいます。このことを島国に住む、どちらかといえば閉鎖的な日本人の私たちもよくよく認識し心していかなければならないと思った次第です。

出会い その8 ワールドカップ=タクシー運転手の辛辣な評価

ドイツ滞在の最終 1 日前の夕方、ゲーテハウスを訪ねました。あいにく軽い雨が降り始めていました。私はホテルの前からタクシーを拾うと行き先を告げました。フランクフルトへの旅行客のほとんどが訪れるという見学コースの中の一つです。運転手は“お茶の子サイサイ”といった雰囲気です。ドイツでは比較的少ない黒人の運転手。そのしぐさや英語の濁りが面白かったので私は話しかけてみました。

「母国はガーナよ。こんどのワールドカップには期待しているぜ！なんてったってアフリカが開催地、地続きの舞台だからね」

そういえば帰国直後には試合が始まります。出発前の国内のニュースでもいろんな形で取り上げられ話題にもなっていました。日本はカメルーンと対戦することになっています。そこで、運転手に正直なところの勝敗予想を聞いてみました。

「そりゃあカメルーンが勝つに決まっているサ。だって実力が違う。点差はそんなにつかないだろうけど、まあ自分の予想では2-0だね。うちのガーナだってニッポンには負けっこないネ」

やっぱり身びいきの予想。そこで参考までに対オランダ、デンマーク戦の彼の“ご託宣”も聞いてみました。そしたらなんと・・・。

「オランダは優勝候補、どれだけ点差がつくかなあ！？ デンマークの実力も日本の比ではない。まあこちらは5-0だね」

なんと、母国・日本はずいぶんナメられたものである。少々癪にさわる返答だがここで“ワレ ニッポン代表”なんて思って反論をしても仕方がない。今いるここドイツだってサッカー王国、4年前のワールドカップの開催地だ。正直、彼の、また彼らの認識はそんなところかもしれません。それでも今年の岡田ジャパンには特別の期待を寄せて、私は翌日の帰国フライトに身を任せたのでした。

帰国後のカメルーン、オランダ、デンマークとの試合結果はテレビで見たとおりです。ガーナの運転手さんよ、確かにあなたの母国も8強とすごかった。でも今のニッポンチームの実力も少しは見直してくれたまえぞな、もし！